

随想

夏目漱石記念の年に思う

神野 雄二

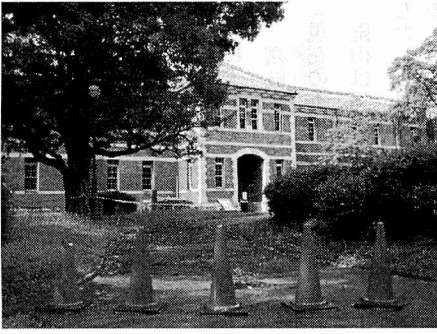
長尾雨山の二つ

て残しました。総合文化誌『KUMAMOTO』第一五号（NP
O 法人くまもと文化振興会、二〇一六年六月）に作品を掲載下さ
いましたので、見て下さいますと幸いです。

はじめに

本年は熊本にとって、また私にとっても、大変な年でした。

平成二八（二〇一六）年四月十四日二時二六分、十六日一時
二五分、熊本を大地震が襲いました。私の家はまさに震源地・熊
本地方にありました。熊本



（図1）被災した五校記念館

大学五校記念館も被災しま
した（図1）。今思い返して
も、もう二度と経験したく
ない出来事でした。熊本大
地震に際し、応援・お見舞
い下さった諸先生方に、心
から感謝申し上げます。有
難うございました。

私は已むにやまれず、書
と画・写真の作品を形にし

平成二八年は夏目漱石（一八六七（慶應三）年二月九日―一九
一六（大正五）年十二月九日）が熊本に来て一二〇年、没後一〇
〇年にあたる。一八九六年（明治二九）四月十三日、漱石は熊本
の第五高等学校（現在の熊本大学）の教師として愛媛の松山中学
から転任した。五校に関して『第五高等学校―熊本大学五校記念
館図録』（熊本大学五校記念館図録編集委員会編著、国立大学法人
熊本大学五校記念館発行、二〇〇七年一〇月）が詳しい。彼は熊
本には約五年間滞在したが、熊本での生活が、後に『草枕』や
『二百十日』の小説として結実した。

私は縁あって熊本に来て十四年になるが、漱石の史跡の多くを
訪ね歩いた。そして、これまで「肥後・熊本学―書道を中心とし
て」として、熊本の書道を中心に文化人を取り上げ拙文を執筆
してきた。中で夏目漱石も何回か取り上げた。いずれ纏めたいと
考えている。「漱石の書」については言うに及ばず、熊本における
書道の歴史さえ書かれていないのが現状である。

漱石は熊本時代、多くの知友をもったが、長尾雨山（一八六四

―一九四二―) その一人といえよう。いずれ二人の関係は詳しく記すとして、ここでは雨山の事跡を簡単にふれておきたい。

長尾雨山は、明治期に活躍した漢学者・教育者・書家・画家・篆刻家である。書画の鑑識にすぐれた。享年七九。

名は甲、字を子生、号は雨山。他に石隠・无悶道人・睡道人、齋号に无悶室・何遠楼・思齋堂・艸聖堂などがある。通称は楨太郎。讃岐高松藩士の長尾勝貞(竹嬾)の長子として香川郡高松(現在の香川県高松市)に生まれる。

雨山は、明治三〇年(一八九七)に熊本の第五高等学校に赴任した。夏目漱石の同僚として親交を結び、漢詩の添削を乞うた。

明治三二年(一八九九)東京高等師範学校教授に転じ、東京帝国大学文科大学で講師を務めた。明治三六年(一九〇三)に、上海の商務印書館の招聘に応じて編集顧問となった。

詩文は幼い頃から父について漢学を受け、天性の詩才を見いだされる。「明の七子の風」を標榜したが、後には唐詩や宋詩に感化を受け独自の詩風を確立した。書はすべての書体をよくしたが、なかでも草書に優れた。画は墨竹図を得意とした。平安書道学会長、日本美術協会評議員を務め、泰東書道院・日本南画院などにも参加した。

詩・書・画に優れたが、書は晋唐を基調とした端正で規格正しく深い味わいのあるものである。掲載の写真は、雨山の筆による箱書きである(図2)(図3)。また彼自身篆刻を善くしたが、自



(図2) 長尾雨山箱書き(表)



(図3) 長尾雨山箱書き(裏)

用印に呉昌碩によるものがある。中国書画についての講演や講話を纏めた『中国書画話』(筑摩書房、一九六五年三月)が刊行されている。作品集に『天璞集』がある。

雨山の史料・文献は、杉村邦彦先生が纏めておられる「長尾雨山とその交友」第一回～第一五回〔墨〕第一二六号～一三〇号、平成七年一〇月～一〇年二月、芸術新聞社）が精しい。熊本大に収蔵される雨山関係の資料・文献を扱ったものを含んでいる。また、大野修作先生は『書法漢學研究』第一八号に、詩文に関する紹介「長尾雨山漢詩補遺集（一）——庄司乙吉との交流から始めて——」（二〇一六年一月、アートライフ社）がある。

雨山が日中交流に果たした功績は甚大で、今後更に顕彰されるべきと思われる。

「閑話休題」

・漱石文学は感受性ゆたかで、芸術性が高い。彼は自然をいつも観察していたと思う。理知より感性が勝っていた人だろうか。あたり前のことを当たり前に捉えようとした人。最も人間臭い人。書画を見てもあまりの素直さに驚くのである。漱石の芸術は誰人であっても分かるのではと思う。見せ方の工夫させてやればよい。子供が持っている、月を見てあたり前に美しいと感じる心。教育はある意味で、感性のあくなき練磨にあると思う。美しいものは世の中に充ち溢れている。このことを大人にならばなるほど忘れてしまう。私は漱石を通して、人間であることの喜びや、日々平凡に生きていることの有り難さを教えられた。

・平成二九年は、正岡子規（一八六七年一〇月一四日生まれ）と夏目漱石（一八六七年二月九日生まれ）の生誕一五〇年の記念の年である。愛媛で生を受け、今熊本で生活する私、二人の偉大なる先人について、たとえ微々たるものであつたとしても、何か顕彰したい。

（じんの・ゆうじ 熊本大学教育学部教授）